

## 【乳幼児観察の心理臨床の場への貢献】

～精神分析家&精神分析的サイコセラピスト育成へ向けて～ (1976)

マーサ・ハリス(Marth Harris)

[原題; The contribution of observation of mother-infant interaction and development to the equipment of a psychoanalyst or psychoanalytic psychotherapist]

エスタ・ビック(Esther Bick)の International Journal of Psychoanalysis(1964)に掲載されております論文に、【タヴィストック・クリニック】で彼女によって創案され、後には【the British Institute of Psychoanalysis】に於ける研修の必須科目として採用されたところの「乳幼児観察」の歴史が詳述されております。それは、この研究所 Institute では今尚も未来の分析家のトレーニングに価値あるものとして継続されておりますし、そして【タヴィストック・クリニック】の「the Department of Children and Parents」に於いても精神分析的サイコセラピストの養成に依然として中核的な役割を担っているわけであります。Mrs.ビックの論文に於いては、その観察の方法並びにそれがどのようにして機能してゆくかのセッティングなど概要が詳述されております。それから、どのような事柄が観察されるのかについてもいろいろと示唆なり、それら事例なども提示されております。さらには、その方法、並びにそのようにして対象に接近した観察のいずれも、精神分析家の臨床的実践に於いていかなる関連性を有するかについても検討されております。

それぞれ訓練生 trainee がそのトレーニングの過程において、1年もしくは2年という期間をとおして家庭を訪問し、週ごとに幼子を母親と一緒に観察し、それらの観察されたものの詳細な記録を書き留め、そして小グループにおいてさらなる討議を加えてゆくことは、分析家にしてもサイコセラピストにしてもかなりの時間を要するものと考えなくてはならないでしょう。いずれ将来児童を専門にはしないつもりで訓練生にとっては、その重要性および妥当性は考えにくいわけであります。しかしながら私の経験から申し上げますと、こうした実践を踏まえて、その傍ら既にこうした厳しくも粘り強い研究に携わってきたところの先達に率いられてのセミナーでそれら観察したことを討議する機会が与えられた訓練生らは、それを唯一絶対とは言わないまでも、ほとんど常に分析的トレーニングにおいて取り分け重要視してきたといえるのであります。それ以降も多くの方々は、別種の観察に取り組んだり、他の人々の観察についての討議に参加してゆくことでさらにこの経験を徹底して深く追求することを積極的に選ばれておいでです。

おそらく、次のような疑問が呈されるかと思われます。訓練生は、その「パーソナル・アナリシス(個人分析)」の過程において、そして症例のスーパービジョンからも、彼が知らねばならない、‘おとなの中の子ども’、そして‘子どもの中の幼子’について知るべきところの総てを学ぶことは可能ではないかと・・・

顕著なる精神分析家、理論家、そして想像的な実践家たちは、こうした構造的な乳幼児観察もしくは児童分析からも恩恵を得てはこなかったという点から考慮しますと、これらの経験が成人を対象とする分析治療に携わる分析家が育成されるうえで必須項目として殊更重要だということはとても言えそうにないと考えられるかもしれません。

しかしながら、精神分析の発展はここに至ってあまりにも多くの理論に溢れて息苦しいほどで、分析業界においても各グループ間においても、互いに詳細な観察に基づいたところの十分に共通した経験を持たないままに、それら理論を論議することにあまりにも多くの時間を費やされてきたということがありはしないでしょうか。そうした精神分析を取り巻く状況は極めて由々しき事態と言わざるを得ないと考えられなくもありません。あらゆる理論への執着はあまりにもしばしば、パーソナル(個人的)な忠義立てもしくは分析派閥への遵守といったことに偏することになりましょう。そうした理論が「児童の発達」および「子育て」といった領域においてほど烈しく論議された学問領域はかつてありません。それは精神分析においてもですし、それはまた小児科学および教育学においても同様であります。熟練した専門家たちは誰もがそれについて承知しており、また何を為すべきかをも充分察知しているわけです。しかし滅多には幼子と一緒に十分な時間を掛け、それで彼らの助言やら‘処方箋’がどのように実際問題として‘生きて働く’ものかその効果やら進展をフォローしてみようとする者はおりません。

精神分析というものを、ただメンタルな疾病の原因 cause を見出し、それを回避する方法を人々に喧伝<sup>けんてん</sup>するところの‘処方箋’を提供すべく探求するところの「説明的な科学 explanatory science」としてではなく、むしろそれら現象そのものを見極め、かつそれを「描写すること description」を中心とした科学的芸術 a science-art としてアプローチすることを想定するならば、分析家の成長には大いに「観察する能力」の強化が重要不可欠と見做さねばならないでしょう。もしも分析家が、道筋ルートを図示するところの明確な地図を持たず、どこに注意を焦点づけていいものかも知らず、また己の志すべき決定的なゴールを念頭に置くこともないとしたら、母親が幼子のしばしば噴出する感情の余波に圧倒され途方に暮れるのにも似て、折々に出会う他者のさまざま<sup>さら</sup>な情動溢れる経験に接して圧倒され、不確かさやら混乱、そして不安感に己の身を晒すことになりましょう。

分析家および患者両者間に於ける親密度および赤裸々なありのままという基本的な観点から申しまして、それは勿論‘分析的プロセス’が進展しているとすればですが(すなわち、それはウイニコットがかつて‘診察室の白熱した経験’と呼んだものでありますけれど・・)、おそらくこれほど母子の関係性に類似するものは他にないといえましょう。このことは、分析家のトレーニング、もしくは精神分析的ソサエティーの討議に於いても得てして盲点になりやすい点かと考えられます。児童分析、もしくは分析的コミュニティーの外でも、誰かが病気と自覚し、それで助けを求めてやって来る、そうした人々の援助にあたるといった場合に較べてみますと、それは容易にお分かりいただけるかと思われます。

精神分析に携わる仲間うちでの議論でも、また診療室においてもまたそうなのでありますが、あまりにもしばしば‘子ども’というものは多分やがて‘大人’<sup>おとな</sup>になるもの、すなわち‘精神分析的権威筋’が適切と見做すところのありようで振舞うべく訓練されてゆくものとして語られているのが常であります。これは‘うまく適応できている子ども’とか、‘分析を成功裏に終えられた訓練生 candidate’を輩出するといった傾向が示されております。そこでは未経験で、まだとても理解できるには程遠い、ですからその統合されていない自己の部分は分裂・排除され、別の誰かそしてどこか(他の家族、他の群)へと投影されるわけであります。そこで、パーソナリティーはその潜在的な活力および豊かさはそれらとともに奪われ、やがて疲弊してゆかざるを得ないといってもよろしいでしょう。

もしわれわれが乳幼児観察での観察者の役割というものをよくよく見てみますと、観察者になるべく学んでゆくことがいかにして分析家になるか学ぼうとすることにどれほど役立つか気づかされるわけであります。(資格づけが修了した後ですらも、そのプロセスは長く引き続けられるといえましょう)。母親と幼い赤ちゃんを身近に親しく観察することは、そうした事態にただ反応するばかりではなく、もしも深く熟考されるとすれば、メンタル・ワーク(精神的な働き)の必要とされる情緒的な経験ともなりましょう。己自身の無意識的な幼児的願望および強烈な不安感を母子関係性のなかへ投影するといった傾向は絶えず避けられませんでしょ。もしインパクトをもたらすところの関係性に十分に接近し得ないとしたら、多くの詳細は失われ、そしてまた‘学びのクオリティー’は損なわれるといえるのであります。その一方で、行為化へと引き摺られないためにも、つまり内省を深めることによって千々に乱れる<sup>おも</sup>想いをコンティンするのではなく、その代わりに喚起された不安感を行為化してしまわないように、母子間で何が起きているのかを観察しながら、観察者は己自身のなかに何が起きているのか、こころの内に‘メンタル・スペース’を維持するべく十分な距離を保つところの己の立ち位置を見出さねばなりません。でも、もしも実験者が実験室で顕微鏡を覗いているような具合に超然とした、距離のある態度をとるとしたら、母親の心を不安で掻き乱し、そして彼女に余計な負担をかけることになるでありましょう。勿論それは最初の訪問時に観察者が誰も内心それを恐れるといってもいいわけですが……。

母親と関係を樹立させるべく立ち位置をまずもって見定めなくてはなりません。おそらく友好的であり、受容的であるということでもいいでしょうし、そして批判的な態度は、表面切ってもしくは暗黙にのいずれにせよ、極力控えるといったことです。そして、彼女が赤ちゃんについて、もしくは彼女自身の赤ちゃんに<sup>まつ</sup>纏わるいかなる感情・思いであれ、打ち明けようとするには何であれ無批判的に興味を抱き、傾聴することといったことなどであります。ここでさらに含まれるのは、かなりの不安感の投影に耐え、そしてすぐさま助言をしたり、もしくは行為でもって即刻それらを解消せんとするといった衝動を抑制するといったことを学ばなくてはならないことです。事実、治療的な熱意は抑制せねばなりません。母親に何らかのことを指し示すことなく、非難したり、もしくは共謀したりすることなしに彼女の感情・思いをそのまま解ってやるといった人間的な反応をすることでしかないのです。‘判断停止’といった内的状態、つまりは「消極的能力」(そのように正しくもキーツの言葉を引用し、ビオンが語っているように)が実際のところ、‘経験から学ぶこと’の前提条件となるわけであります。また人は誰も、自らの全知的先入

観といった誤謬<sup>ごびゅう</sup>に陥りやすいことを幾らかでもわきまえているならば、自ずから「謙遜<sup>けんそん</sup>」というものを学ぶことになりましようから、そうしたことも肝腎かと思われまます。

セミナーのディスカッション・グループにおいて受講生は互いにそれぞれの経験を交換しながらいろいろと学んでゆくわけですが、まずその一つは、それぞれの母親を「固有なる一人のひと」として対応しなければならぬということでありまます。そして観察者自らがそこに立ち会って存在しているということ、その発する語りかけやら振る舞いが母親に及ぼすどのような影響があるのかも見てゆかねばなりませんし、さらには母親の幼兒的期待感やら恐怖などが観察者へ「転移」されるということもありましようから、それをも徐々に認識してゆかねばなりません。観察者がすでに自ら「個人分析」を受けておりまます場合ですと、観察中にこころのうちに去来するさまざま「逆転移」について整理してゆく機会が与えられていることになりまます。訓練生として患者との臨床的実践に携わることで多くを学ぶこともありましようが、こうした観察の場で自らの心の状態を明確化する助けを得るとも考えられるのでありまます。しかしながら、友好的でかつ侵襲的ではない関係性を築いてゆくうえで、どのようにして有効なるスタンスを見出すか、それぞれ観察者が有するところの特殊な問題は観察が討論されるころのセミナーに於いて論議されかつ共有されることになりましよう。それぞれ観察者固有の精神病理は自らの分析もしくは自己分析の問題でありまます、赤ちゃんもしくは母親の痛苦に対する逆転移ゆえに惹起される投影及び行為化への挑発といったことをどう理解するかという問題は、或る程度のところ観察者誰にも共通したものでありまますから、それらはセミナーにおいて学びの経験として分かち合うことで出来るわけです。

当然ながら観察者は、暗黙裏に何らかの既成概念でもって観察に臨んでいるということにいずれ気づくことになりましよう。それにはおそらく赤ちゃんはいかに扱われるべきかといった学説なども含まれましようが、母親を批判する傾向をも伴いがちでありまます。それらは或る母子関係性を理想化する意味で「防衛」としても使われるかと思われまます。セミナーのグループに於いて他の観察者の母子に較べてまるで品評会のような雰囲気呈することがある場合ですと・・・すなわちくわたしの見ている母親と赤ちゃんはなんて素敵なんでしょう！>といった具合にです。アナリサンド(被分析者)が自分の分析家に「理想化された投影同一視」をする状況では、これにも似た、同じような響きで語られるのをしばしば耳にすることがありまます。再び、こうした傾向もまた、誰かと密接な関係を持つことで必然的に極めて原始的で幼兒的な情緒が喚起されるといった現象としてセミナーに於いて一般的に論議されることになりましよう。そこで発表される観察の詳細に注意を傾け、それらの意味するところのものを議論してまいりまますと、それまで把握されていなかった状況の何らかの側面が表立ってまいりまます。それで観察者の記憶にさらなる詳細が呼び起こされ、その時まで気づかなかった事実を理解してゆけるように援助されてまいるわけなのです。

もし訓練生の了解し得ない事の詳細をことごとく呼び起こされるべく励まされるといった点から申しまますと、セミナーで観察されたことについて検討し議論を重ねてゆくことは、臨床事例の検討会やら、もしくはスーパーヴィジョンにも似た同じ機能があるといえましよう。詰まりのところ、訓練生もしくは観察者

は、その報告する事例のセッションに於いて、それぞれ違った時期に彼が陥っていた‘混乱’から脱け出し、この混乱のなかに何らかの意味ある‘パターン’を後から考えつくわけなので、そのようにしてどうやら治療の流れを建て直し、再構築することを助けられてゆくこととなります。こうした混乱に耐え、それでスーパーヴァイザーとそれらを分かち合うことのできる訓練生は、スーパーヴィジョンからより多くの有益なものを掴むように思われます。どちらかという洗練されたパフォーマンスで発表に臨み、もうそれ以上何ら疑問の余地はないといったスタンスをとる人よりも…。赤ちゃんがどんなふう成長するかを真摯に学び始め、その発達の複雑さにいっそうのこと興味を募らせてゆきますと、観察者は、母親の赤ちゃんに向けられる興味をも強化しがちでありますし、赤ちゃんに対して実際の世話に限らず、赤ちゃんを‘理解する’能力を培ってゆくという点でも大いに励ますように考えられます。セミナーで互いに交替して観察例を発表しながら、それぞれユニークでありながらも似たような情緒的に掛かり合う経験を分かち合うことは、それぞれの観察者にとって週ごとにその特別な研究対象たる幼子の家族を訪ねて観察する際、よりいっそう自意識的ではなく、その家族の雰囲気にごく自然に溶け込んで参加できることとなりますし、そして観察者自らの逆転移からも学んでゆくうえでも大いに助けとなるわけなのであります。そうした状況を目一杯有意義に活用するために、観察者はまず自由に「感じること(to feel)」が出来なくてはなりませんし、しかもそれらを行為化する己自身を抑制するためにも、そうした己の感じるどころについて「考えること to think」が出来なくてはなりません。

以上述べましたところの要点は、精神分析家を目指して目下研修中であるといった研修生にとっても明らかに直接的な関連性があるわけです。診療室で彼は、連続的な観察の状況に携わるわけですから、もしこうした‘情緒的受容性 emotional receptivity’といった姿勢を貫くことを学んでいるとしたら、そこで彼は患者の信頼を得られるだけではなく、患者のパーソナリティーのより「原始的な幼児的部分」の投影をますます受容できてゆくことになるかと思われまふ。成人を対象とした臨床においては、児童臨床に較べますと、言語が重視されますから、それが表層的に意味するところのものに誤って導かれるということがままあるわけです。これは、特にトレーニングの症例の場合に言えることでもあります。一人の大人として、この場合特に他の人々の問題症状を扱おうとする意欲を抱いている人というのは、人のパーソナリティーのより傷つきやすい、もしくは厄介でかつ厭な部分について感知することが素早いとかとても得手といってもいいでしょう。詰まりのところ、他の人のなかにと同様に自分自身のうちにおいても、それについて殊更云々しようとする才覚は、どうしても対象との間に何らかの距離を生じさせ、よそよそしさを募らせがちであるわけです。

乳幼児観察者としての姿勢から、意欲的な未来の分析家が学ぶことは多いといえまふ。すなわち、言葉を表面だけで捉えるばかりではなく、患者の全体的な雰囲気やら振る舞い(行動)を十分に考慮に入れることが援助されるという意味合いで…。つまり語られる言葉の‘行間’を読むことなのであり、そしてそこで伝えられているもしくは回避されているといった経験の質なるものをしっかり見分けることなのです。そして患者への自らの反応において、何が起こっているのかについて何らかの直感が蓄積されるまでは待つことなのでありますが、そうしたこともまた援助されるといえまふ。もしもこうした

不確かさと混乱の事態に耐えられないとしたら、彼はまず手っ取り早く説明してしまうでしょう。だが、そうすることで患者のなかの情緒的経験がいずれ姿を現わす前に、こちらが行動を起こしてそれを阻止してしまい、無効にしかねません。幼子および母親の観察者の多くが認めるところですが、子どもの発達について書かれた本などは、まだ子育ての経験が充分とはいえない母親にとっては慰めであり得るわけですが、でもそれはまた、わが子について思いを凝らす (pondering) 母親の直接的な経験に割り込んでくるともいえるわけです。おそらく時としては分析家或いは訓練生は、権威付けされた‘お墨付き’といった理論とか、習熟したところの解釈、もしくはごく単純な決まりきった規範といったものを重宝がり、それらを後ろ盾にしてがちり武装したいと思うことは折々にあるかと思われます。しかし、それにあまりにも頼り過ぎて、機械的になってはいないかどうか留意してみることがあってもよろしいでしょう。

観察者は、赤ちゃんをその誕生後の最初の数週間を観察し、また母親のそれへの反応を観察しながらも、幼子のかくも無力な存在というものが—それは生まれたばかりの動物の子どもとも大いに違うわけですが—強烈な不安感を経験しているということ、しかも確かにそこには「心というものが息づいている mental life」ということが認められるわけですし、それで見る者にとっていかに痛苦の念を覚えさせるかを学んでまいります。小さな動物たちとは違い、人間の赤ちゃんはその身体的なニーズおよび不快感に対処するすべがありません。何らかの助けが現れるまで待たされるわけで、その待つ苦痛に耐えねばなりません。それらの痛苦は、それらの身体的ニーズが充たされることで和らぐというばかりではなく、理解されること、すなわち社会的接触、愛情をとおして和らげられるともいえます。

もしわれわれが「分析的転移」を、幼児的な関係性並びにその願望が外在化されるプロセスとして了解するといえますと、子どもの関係性の成長の軌跡を、まさにその史実に即して、週ごとのセッションのなかで継続してフォローする機会が与えられることもなりましょう。すなわちそこでは、どんなふうに子どもはその発達の能力を援用し、それらの関係性のコンテキスト内において、自らの世界を意味づけることをするのか、その内側および外側から彼に及ぼすところの刺激を材料にしてどんな‘空想’<sup>つむ</sup>を紡いでゆくか、それがまさにうかがわれるわけであります。そうでありますと疑いなく、分析家の感受性に、そうした転移の質なるものおよび動きが加味されてまいります。例えば、最初の誕生後6ヶ月の間での観察は、幼子の対象関係がどのように始まってゆくのか、すなわちそこでは赤ちゃんはどのように自分自身の未統合な部分を母親の部分に関係づけてゆくのがうかがわれるわけですが、それをじっくり観察する機会がもたらされます。かくして、われわれの誰もが薄々知らなくも無いことをここに至って切実に深く自覚させられることになるわけであります。すなわち、最も原始的なレベルでの「情緒 emotions」とは身体的な状態に根ざしているということ、そして感覚 sensations とはその身体のそれぞれ部位に位置づけられおり、それら感覚は母親の情緒的反応をとおして育かれ、そして意味づけが与えられるといった、まさにそうした赤ちゃんの‘現実’であります。

このことは明らかに、患者の「心身症的症状」を理解するうえで関連づけられるかと思われます。そしてまた、患者たちが誰かについて縷々語るのを聴きながらも、それらの語り narratives の底に、実は

もう一つ「最早期の部分対象レベルでの関係性 the earliest part-object relationships」に絡んで別の意味ある層がいかに密かに潜在しているかを理解する手助けともなりましょう。その中核となるのは「乳首とオッパイの結びつき」といったことになるわけですが・・・詰まりのところ、与えることおよび保留することを規制し、受容的かつ癒的であり、甘やかしてもくれるといったプライマリーな(原初的)対象の有する質・クオリティーであります。と言いますのは、明らかに誕生後の一年目について殊更に明示的に言及するまでもなく、多くの患者を援助することが出来ましょうし、そしてついでに申せば‘治癒’することだって可能であるとしても、われわれは、その精神病理の源を遡れば、その程度の差こそあれ、大概のところ問題がそうした早期にあるといった人々を相手にしているのであります。いかにその病理がその症状においてその様相をさまざまに変容するとしても・・・われわれがこの時期に一体何が起きるものか、幼子たちを観察し、想いをさまざまに廻らす機会が豊富であればあるほど、患者にその無意識の領域を喚起させるところの「比喩的なことば metaphorical terms」でもって語りかけることができることになるのであります。それが、彼のこころの内ですれ無意識的内容にリンクづけされ、やがて意味が回復されてゆくわけであります。そして患者という個々の存在について何らかの抽象的観念から云々されるのではなく、むしろ患者のなかの‘幼児性の空想’の機能(はたらき)がわれわれにとって描写し得る何らかの‘現象’として認知されてまいりますと、尚更にそれがいっそう促されてゆくかと思われ

例えば、逆転移を活用して患者の言語的コミュニケーションにおける「情緒もしくは情緒の欠乏」といったクオリティーについて、すなわち「意味もしくは意味の欠如」といったことでもありますが、そうしたことを認知する能力をどのようにわれわれは開拓し得るか、そうした訓練というものについてここで考えてみることにいたしましょう。まずはエスタ・ビックの業績であります。それに追随して多くの方々が乳幼児観察に携わることになりましたし、それからドナルド・メルツァー及びそのお仲間たちが手掛けた業績、すなわち自閉症の子どもの発達をフォローしたものがありますが、それらは「二次元的関係性」およびそうした「二次的な学びのモード」といった現象にわれわれの注意を促しました。それはすなわち、他人の行為を模倣し、そのままそっくり写し取ることであり、それは‘心的痛苦’を回避する方法としてあるわけであり、パーソナリティーの発達に導かれることは決してないのであります。こうした二次的に外界の対象にしがみつくといいありよう、そして大人の振る舞いをそっくり模写するといったことは、すべての子どもの成長過程のなかに、それからすべてのおとなの日常生活においても、そうしたことはあるといえましょう。そしてまた、それが情緒的な経験に対して全面的に拡張された‘防衛’となってゆく場合、発達の不毛もしくは阻止といったことが起こるのであります。それは一見して正常に振舞う人のパーソナリティーにおいてよりも、むしろ深刻な重度の病態像のなかにより探知し得るものと思われ

ます。それに例えば診療室で、患者が分析を受けているかのように振舞いながらも、だが実際のところでは痛苦を味わう経験を賢くも上手に回避しているといった患者に見られるといってもいいでしょう。こうした患者は、‘内なるコンテナ internal container’もしくは‘内なるオッパイ internal breast’に欠陥があるといえるかと思われ

ゆる新規な経験がそうであるわけですが—抱えてくれて、かつ有効に活用できるようにと援助してくれるものなのですが…。

幼子の身体感覚レベルの経験が、外界の対象との関係性を伴い、どのように内在化されるか否かといった探究は、そうした患者を理解するにあたって、もしくはそうした心的状態はあらゆる患者のなかに時として存在していると言えるかと思われまので、それへの理解に同じく光を投げかけるものでありましょう。幼児期における摂り入れが真っ当であったか、もしくは妨げられていたかといった過去の事情についての疑問は、分析的プロセスの研究にも適用可能のように考えられます。詰まりのところ、そうした治療過程においては、患者がいっそう己自身に馴染んでゆき、己が経験しているものにより意識が深められ、それらをいっそう取り込んでゆけることを可能にする、より受容的でかつ強靱な対象を内在化してゆくことがその眼目なのでありますから…。

意味のある潜在的な己自身のクオリティー並びにその部分を有効活用できるためにも、それらはたぶん他の誰かと一緒に幼児レベルに於いて表出され、そしてじっくりと吟味検討されてゆくことが必要でありましょう。幼子はその痛苦および攻撃性を表出することができるようになることがどんなに必要かといった観察は、治療対象が児童であってもおとなであっても、分析セッションのなかでそうした攻撃性を個人的なものとして治療者が捉えないためにも役に立つといえましょう。例えば、一見して言葉で、もしくは行為でもって表出された攻撃性とは、患者の側に立ちますと、分析家を何が何でも感じさせんとするためなのであります。そもそもその感じさせんとするものというのは、それについて「考える」といった能力が備わっていないせいで、己自身感じる事がまだ耐えられずにいるといった何かなのです。ですから、それは否定的な行動というよりも、むしろ「痛苦の排出 evacuation」といったふうに理解されるとよろしいわけです。メルツァーが分析における「トイレ・オツパイ」と名付けておりますが、すなわち、それは転移上、幼子によって最初には‘部分対象レベル’で了解・把握されたところの母親のプライマリーな機能を希求している、そうした幼子のニーズとして現れたものといつてよろしいでしょう。

幼子の耐え難い不快を取り除いてやること—基本的には死の恐怖であります—それはすなわち恐怖でこころが侵蝕されるのを食い止め、かつ除去してやることなのでして、そしてそれら不快やら恐怖をより同化し得るかたちで幼子に戻してやることであります。それこそ幼子の誕生後の最初の週そして月に、母親によって繰り返されるプライマリーな機能として、その滋養を与える機能に並行してうかがわれるものなのであります。母親が十分にそうした幼子によって投げかけられる原始的不安のインパクトに耐えて彼女自身それを感じてやることができず、その代わりにすばやく彼女自身の身体部分(オツパイ)、もしくはその代理となるもの—哺乳瓶、ダミー、もしくは後には菓子—を与え、幼子のぐずり声を止めさせようといたしますと、そうした状況ではどういう結果が招かれるか、それらを観察から窺い知ることが出来ましょう。解釈、慰撫といった分析に於いて与えられるものが、それにも似たものになろうかと考えられます。すなわち、それでこれまでのところ把握されていなかった情緒が徐々に明らかとなることもありましょうが、それらが表出されるのを未然に食い止めかねないことにもなるわけです。詰まりのとこ



ろ、それらの表出に‘苦痛’が伴うのは確かとはいえ、それがまたより一層の活力そしてこころの豊かさといった未来を約束するものなのですから…。行為レベルにあまりにも捕らわれすぎますと、どちらかと言うと、外界の実体的対象に依存することを永続させ、つまりいつもどこかに十分に良き外的対象がいて世話をしてくれるはずといった、幼児的な思い込みを強化することになりかねないかと思われます。

一人の観察者としての己自身の経験をとおして、そして母親が母親になってゆくことを学ぼうとしている一人の母親の成長を観察することをとおして学んでゆく主要なる真実とは、‘分析的なカップル’の関係性についても直接的に適用可能であります。待ちの態勢で控えていること、受容的であり、こころを遮断せずにいられること、投影される痛苦に耐えること、それには自らの不確かさの痛苦も含まれますが、そうした諸々のことは、どちらかというそれら苦痛を排出すべく意図された行動を煽ったり、そして手っ取り早く何らかの安堵感を得ようとしたりするよりも、いっそう苦痛でもあるわけです。

観察者は、しばしば最初の頃、またおそらくその後もずうっと、ただそこに存在し、注意を傾け、そして耐え難い苦痛に満ちた状況に興味を抱くだけでは充分ではないと感じてしまいがちであります。そこで何か手助けしなければと思ひ、それで自分がそこに存在することを正当化したいと思うわけでありませぬ。観察者は、赤ちゃんのどうにもならない無力感を目の当たりにして不安で圧倒される母親を観察することがあるかもしれません。そうした早期の頃には、おそらく母親は常に何ごとかをしていないと落ち着かない気分になり、意識的にはどうか赤ちゃんが感じてる苦痛を阻止せんと意図でもって、忙しくオッパイをあげてみたり、ダミーを口に咥えさせたり、赤ちゃんを抱っこすることを頻りにすることでしょう。しかしこうした赤ちゃんの身体的ニーズに対応して過剰なほどに世話を焼くことをとおして幼子に伝えられるのは、うまく消化吸収されないままの不安感の投影であります。それは赤ちゃんをただ混乱させるだけであって、彼自身の情緒と母親のそれを区別するうえで全然助けにならないのであります。また、たとえ幼子によって投影された不安感が母親の心のうちで深く思い巡らせられたとしましても、母親がそこで必要とされる理解に見合った反応ができるとも限りませぬでしょう。それは、患者のコミュニケーションを理解しようと努める分析家がごく限られた了解でしか応えられないのに幾らか似ているのではなからうかと思われませぬ。しかしそれでも尚、理解しようと努めることを維持せんとする能力は、それ自体が「思考する対象 a thinking object」との同一化を育むといった意味で大いに励ましになるといってもよろしいかと思われませぬ。

観察者は、しばしば赤ちゃんが成長し大きくなるにつれ、母親の不安感が減じてゆくようすを観察いたします。そのように彼女が内省 reflection にもっと時間と空間を与えることができるようになりますと、赤ちゃんからもどのようにその必要性に見合うことができるのかを学んでゆけるようになりますし、そしてわが子をいっそうよりよく理解してゆくことだってできるでしょう。しかし観察者は、それには時間が掛かるということ、そして‘お互いがお互いを発見しあう’といったプロセスは、当事者以外の他からの能動的な介入やら教えられ導かれることで急がされたりなどはできないということも見て分かってゆくわけでありませぬ。それと同じようなプロセスが、分析的な関係性が樹立されてゆくうえでも生じるものと考えられる

のです。不安を抱えた研修生をスーパービジョンするスーパーヴァイザーは、ここで(頻繁に乳幼児観察中に訪ねてくるといった)‘義理の母親’の過剰で迫害的な介入といったものをしばし想起してみたいかがでしょう。そこから幾らかヒントを掴むことがあるのではないかと思います。詰まりのところ、まだお互いに不慣れなペアに割り込んであまりにも援助的であろうと介入することはしてはならないということ、そしてまだ始めて間もない分析家を支えてあげ、その意気を挫けさせないためにも、そこそこスーパーヴァイザーとしてどのようなスタンスを見つけてゆけばいいのかについてであります。。。

さまざまに異なる母親と赤ちゃんについてセミナーで論議を重ねるなかで、母親のみならず、赤ちゃんにしてもそれぞれ有するところの気質がどれほど相異なるかということが分かってまいります。事実自ら不安感を抱えられる赤ちゃんもいるでしょうし、他にも多分自分のニーズを伝えることができ、それが満たされた場合にはすこぶる喜色満面に反応し、従って母親のなかに潜在している‘母親らしさ’といったクオリティーが引き出されてゆくといったわけなのですが、そうした赤ちゃんもいるでしょう。その一方で、誕生時からしてすでに気難しい厄介な気質で、なかなか落ち着いて満足してくれないといった子どももいて、それで無理な要求をし、専制的であり、母親に果てしない心労やら我慢を強いるといった子どももいるでしょう。そんなふうでも、母親が自らのうちに‘母親らしさ’といったクオリティーを育ててゆくことを学ぶこともあつたりなかったり、どちらとも言えませんけれども。。。

以上考察しました点はまた、患者・分析家の関係性にも当て嵌まるといえましょう。患者はまさにさまざまです。成長への願望、そして自らの‘真実’にいくらかでも馴染んでゆくことに強い欲求があり、それで分析の始めから熱心で、それなりの成果を遂げられる患者もいれば、全然そうではなくて、絶えずセッションの流れを故意に妨害し、その一方でその要求がまじさにおいてはかなり執拗であるといった患者もいるわけであります。

私はここで、2つほど「事例」を提供いたしましょう。最初のは、誕生以降14ヶ月間に亘る赤ちゃん観察の事例であります。次のは、これ迄のところほぼ15ヶ月間分析セッションに通っております若い男性の症例であります。これら記録の抜粋は、「乳幼児観察」を背景にいたしますと、治療セッションのなかで転移において浮き彫りとなる‘幼兒的様相’がこのように想起し得るものになるといった点で、それがどれほど援助的かといったことをお伝えできればと思ひまして、ここに提示されたわけであります。

## 《事例》: 赤ちゃんウィリアム

ウィリアムは若いカップルの最初の赤ちゃんでありまして、今や誕生後14ヶ月目であります。両親は彼の成長に著しい興味を抱いておりました。母乳を与えられておりました、最初から吸い付きには全然問題はありません。彼が3, 4週間目になって、ちょっとした問題が生じました。母親のお乳の出が悪くなっていったのであります。出産後に遅延して起きた感染に罹り、それで服用していた抗生物質の

せいでありました。その当時、ウィリアムはしょっちゅうお乳を欲しがり、頻繁に目覚め、そしてオッパイを必死になって探すといったふうでした。お乳の出が明らかに戻ってきた時も、こうした感じはしつこく続きました。それでついに両親は自分たちも睡眠を取る必要があるし、こんなふうにはっきりなしにウィリアムに授乳することは良くないだろうと判断したわけです。それで父親が彼をゆったりと腕に抱いて揺すりながら、彼が寝入るまで泣かせ続けておりました。そういうわけで、それ以後彼は再び夜中どうにか寝付くようになってまいりました。しかしながら、こうした混乱を味わった後の幾週間の間、授乳後に彼が舌を唇の間に突き出し、恰も乳首によって占められていた‘穴’を埋めるといったふうな仕草をするのがうかがわれました。

ウィリアムのオッパイとの関係性は、それに加えて母親との関係性ですが、彼女はいっそう全体的対象 whole object として知覚されていたわけですが、熱情的ともいえる苛烈さそして惚れ込みようによって特徴づけられており、明らかに父親についてはそれほどでもなかったといえましょう。他の人たちに対しては、友好的ともいえましたが、でも幾分冷めたふうな関心を向けていたといえます。4ヶ月目ごろから、彼は折々に母乳を与えられている間に何やら悶えるような苦しげな表情で訴えることがありました。普通にはそれは授乳の終わり頃で、彼はそれがもう終わりそうだと悟って気持ちが焦り動転しているかのように見えたのであります。また折には、それは授乳が始まった頃なのですが、彼はオッパイから啜くわえていた口を離し、恰もそれがどこかにいなくなっていたことに文句を言うみたいにおっぱいを叱りつけているといったふうに見られたのであります。こうした時期にも拘わらず、母乳哺育は引き続きもう4ヶ月ほど続いてゆきました。それは大概のところ彼にとっても母親にとっても双方共に大変たの愉しげな時間であったといえましょう。

それ以後のさらなる4ヶ月の間、ウィリアムは他の食べ物をいろいろな食べられるようになってゆきます。両親が食べているものは何でも口に入れて味見したがりました。その初めの頃、これら他の食べ物にはひどく執心しまして、それこそ無差別にがついたといえましょう。指で掴みとり、それを口のなかへと放り込むといったふうで、それらをよくよく味わたのって愉しむというよりもむしろ所有しようとする意欲があまりにも強かったともいえそうです。やがて固形食も食べるようになってゆきました。それらを食べることに積極的かつ意欲満々でありました。<この子は、食べるものはどれも自分の指先から来るって思ってるみたい・>と、母親が言っております。

やがて離乳の時期が訪れ、彼の食欲はいくらか減り、そして食べ物の区別もできるようになっていきました。それぞれ違った食べ物の味を愉しんでいるようであります。彼の親指の重要性はそれほどなくなり、その代わりに、動作性が急成長をし始め、そして周囲を探索するのに弾みが付いていったこととなります。それから、指しゃぶりもどうか‘発話する’努力に取って変えられるようになりました。何か耐えられないような嫌なことや困ったことが起きた折に慰めてくれるものとして、それからベッドに寝かせられる前にですが、彼は小さめはねぶとんの羽布団に気持ちを向けます。それは誕生以後コットのなかにも置かれてあったものです。彼は口と顔をそこに深く押し付けるのであります。かつて彼がオッパイに

そのように顔を押し付けたのと同じ具合に・・・これに夢中になっていた時期を過ぎますと、やがて彼は徐々にそれを諦め、どちらかという人々との関係性の輪を広げてゆくようでありました。それと同時に彼は周りの対象物の探索にはひどく熱心になってまいりました。特に扉の取っ手やら電灯のスイッチであります。最初の頃から電灯が点いたり消えたりするのを見るのにひどく魅了され、今や彼はそれを自分で実際やってみることにひどく執心するようになります。

最初の誕生日を迎えたそのすぐ後に、家族内でさほど深刻ではないにしても或る病気が起こります。ちょっとした風邪といったことでした。同時に、母親は息子の誕生前から書き始めていた小説を完成させようと普段よりもそれに掛かりつきりになっていたわけですが、ウィリアムはこれに憤りを覚えたようであります。母親の使うタイプライターをまるっきり‘敵’でもあるかのように見做したわけであります。そして彼自身、風邪を長引かせてしまいました。それからますます再び小さな羽布団に執着するようになったのです。それをしょっちゅういつも手に持っていないと気が済まないのです。入浴中ですらも・・・彼は食べ物を食べるのもぐずぐずしてうるさくあれこれ文句を付けたりし始めます。こんなことは初めてでありました。珍しくも睡眠もまた気まぐれで落ち着きがなくなり、明らかに誰に対しても友好的とも反応的ともいえない状態がうかがわれました。彼は頻りに母親にしがみつこうになり、そうであってもそこには親しみやら喜びはさほど見当たりません。母親の着ている服に顔を埋めることをしましたが、それはいつもの羽布団に自分の顔を押し付けるのにも似たふうでした。でもしばしば彼は、ママやらパパよりも断然羽布団の方がむしろお気に入りなのでした。その重要な点は、それが柔らかいといったことにあったようです。そして事実としてその羽布団を相手に、掴み取ったり、床に落とすやら、またその上に乗っかるやら横になるやら、もしくは遠くにポイと投げたりするなどいろいろでしたが、部屋を探索して歩き回る際にはいつも手に掴んだままで放すことはありません。彼はまた、オムツを取り替えられ、お尻を拭かれることに時々機嫌を損ねて、抵抗します。それはまるでく恰も追いはぎに遭ったみたいに大騒ぎするんですよ>と、母親が言ったとおりでありました。

彼の両親は、その羽布団はねぶとん(実際のところ‘過渡的对象 transitional object’なわけですけども)が人々との交わりのチャンスを彼から奪うものとして懸念し始め、それでそれをいつもあるべきところに、つまりコットの中に置いておくことにしてはどうだろうかと考えたわけでした。それを取り上げられた最初の日、ウィリアムはひどく動揺し、カンシャクを起します。いかにもこの世の終わりともいった具合に悲惨の極みで、床にからだを投げ出し大暴れます。そして、カーペットおよびベルベットの椅子カバーを唇で吸っておりました。2、3日過ぎた頃には、母親からちょっと余計に注意を貰うこともあって、もはや羽布団を求めなくなり、コットのなかに置いておくことに納得してきたかのように見えました。彼の睡眠は好転し、そして明らかに人々に対しても再び友好的になってきたといえます。彼が探索に熱中していたところの外界の物たちと同じく、つまり単なる‘家具’の類いとして人々を扱うといったことはもはやなくなっていったのです。要するに、ここに至って、ようやくウィリアムにとって都合のいい、自在に使用可能な羽布団といった‘部分対象－関係性’への甚だしい退行はどうか阻止されたということになります。

## 《症例》; P. 医師

P. 医師は20代後半の若い研修医であります。分析セッションを開始したのは15ヶ月ほど前のことで、彼は最初とても慎重な態度で、分析が彼の患者らにいくらかでも役に立つかどうかを試しに来たといった印象でありました。彼はそれからますます身を入れ始め、分析技法なるものを有難がるようになってゆきました。彼は殊に知的能力に秀でた、良心的ともいえる若い男性でありました。基本的にはあけっぴろげで親しみ深いパーソナリティーです。しかし著しく強迫的な特性を有していたともいえます。恵まれた裕福な家庭環境で、極めて道徳的な生い立ちであります。彼は成功している父親を尊敬しておりまして、そして意識的には仕事の上で業績をあげたいとか己自身に忠実でありたいと願ってはいるのですが、どちらかという小賢しいところがあり、いくら見栄を張るといった傾向やら、努力家というよりもむしろ安易に縁故に頼りがちであるといった傾向をいくら内心危ぶんでいたともいえます。これに伴い、スポーツでは決して目立って芳しい成績を挙げられなかったのを遺憾に思っていたということがありました。スポーツについては得意ではあったけれども、けっして殊更に他と較べて秀でていたわけではなかったのです。

分析セッションで提示される分析資料は、目下のところ差し迫った「クリスマス休暇」に集中しております。それを間近に控え、気分的にかなり動揺を来していたのです。彼は抑うつ的になるのではないかと、分析に対して無関心になったり、もしくは分析への信頼が頓挫したりするのではと恐れたり、それに分析家の身に何か起こるのではないかとという恐怖、例えばひどい風邪を引くとか路上で車の事故に遭うとか、そうしたことを気に病んだり、気持ちが悪く右往左往していたわけでありました。

彼は週5回のセッションに通っております。或る木曜日に、彼は夢を語りました。3人の国際的に有名なラグビーの選手がいます。その一人は彼の個人的な知り合いです。他はどちらかというよそよそしく、距離がある感じです。彼らは皆、‘高得点者’であり、彼はとても彼らと同類とは言えないわけがあります。彼は、自分の乗用車を MOT [※註：車検；特定年数を経過した自動車に対して義務づけられている安全性・環境適合性検査] にクリスマス休暇中出す予定であることを思い出し、それで面倒だなと思いました。免許を更新しなくてはならないわけなのです。彼はまたもう一つ心配ごとがありました。それは、病院の彼の個室の状態がまるでゴミ捨て場みたいに私物を置く場所として使われていることでした。彼は仕事以外の余暇はガールフレンドの住まいで過ごしており、そのフラットは彼女そしてもう一人の女性と共同で暮らしていたのであります。これら分析資料は、転移上の意味を十分に有しております。すなわち、幼子の自制できない※、かつ淫乱なペニスおよびお尻が、パパの性的能力（ゴールしてスコアを稼ぐこと）、それに赤ちゃんもつれて、ママにもサービスできるといったそれとの比較に於いて、なんと哀れを催すような屈辱感がそこにかがわれるのであります。こうした脈絡での解釈は彼にとってもどうにか受容し得るものであります。[※註：incontinent (医) 失禁の意味がある。]

翌日の金曜日に訪れてすぐさま、実はさっき見た夢を詳しく語ってもいいんだけど、でも今の自分の心の状態を綿密に忖度しないでするの馬鹿げていると彼は語ります。これまでですと、彼は常に喜んで意欲的に夢を持参してまいりました。夢について語ったセッションは稔りあるセッションに感じる傾向があり、彼自らについてじっくり考える意味でも大いに啓発されるといった印象を覚えていたわけです。ですから、こうした出し渋りといったアプローチはむしろ珍しかったのであります。彼はこの夢について語ることにセッションの殆どを費やしたのでありますが、恰もそれを与えようとしながらも、でも打ち明けにはひどく躊躇があるといった感じでした。ひっきりなしに喋ってはいましたものの、実質的には何も語っていないといったふうです。いかにも勿体ぶったふうに、夢そのものについて率直に語るの極力控えて、遠回しにあれこれとその動機なるものについて綿々と‘自己分析’していったわけなのです。

彼が夢を語るのを渋り躊躇するのは、どうやらその前日の分析資料に関連性があるようです。すなわち、小さな男の子というものは父親の‘第一級の立場’（ママを元気付けるところのペニスと睾丸）を有していないといった‘屈辱感’についてであったわけですが・・・そこで彼はそれらを認めたくないがために、敢えて回避せんと試み、それで‘糞便’などではない、自分にだってもっと何かしら価値あるものがあるんだということを自らに納得させるためにも、わざわざ勿体ぶって分析家のなかに好奇心を喚起させんとしていたということでありましょう。

彼がとりとめもなく散漫に、そしていかにも焦らすふうにして話をしている最中、私のところに思い浮かんだイメージというのは、いかにもオッパイはもう終わりと離乳を脅かされている幼子であります。自分がそれ（オッパイ）ではないということ、それを自分が排他的に所有しているわけではないといった理解に躍起になって抗っており、どうにも折り合いがつかないといったふうであります。さらには、つい最近歩行を始めただけであり、その技量においても制限があり、つまり必ずしもいつもうまく行くとはいえない、そうした証拠に繰り返し遭遇し、惨めで情けない思いをしている子どもでもあります。お父さんのようにスイスイとまっすぐ歩くことも出来ず、もしくはお父さんみたいにすらすら流暢に話をすることも出来ないわけです。そんなふうには父親はお母さんにあれこれ語りかけ、そして活気をもたらすことが出来て、それに彼女に赤ちゃんを与えるといったこともそうですし、また彼女を喜ばすいろいろなこともしてあげることが出来るわけですが、それは子どもの彼には無理なわけです。これは、その対象を占有しコントロールすることに躍起になるあまり、自分にそれが与えてくれるものを受け入れられない、そんな幼子であります。その子どもは、恰もハイ・チェアに陣取って、食べ物を目の前にしてそれらをいじり遊んでいる最中で、でもその心の内側ではお尻の下にウンチを押し潰していることに気を奪われているわけです。それで母親に向かっていかにも嘲るように挑発しているかのようでもあります。＜ほらね、オムツを取り替えてあげようか、それでウンコも片付けようか。そしたら、たぶん落ち着いてお食事に取り掛かれるね・・・＞

こうしたふうな「比喩的なことば」で彼のこの場での振る舞いについて描写を試みますと、やがてなかなか面白い反応が呼び覚まされ、ついに彼は隠し持っていた夢を語るに至ったわけであります。その夢とは次のようなものでした。《病名は定かではないのだが、或る病気に罹った子どもがいた。カンファラン

ス(症例検討会)でそこに集う医師たちは、その女の子は特別な治療が必要だという見解に達し、それでメルボルンからコンサルタントの医師を招くことが決定された。やがてその彼が到着してみると、そのコンサルタントは実はこの被分析者自身であるようであった。しかしながら、どうやら子どもの治療についてあれこれ今後の方針を見定める前に、彼は別の部屋、つまりセミナー・ルームに行かねばならないことになっているようなのだ。そこには医師やら看護師たちが集っており、テーブルを囲んで坐っており、そして一人のアメリカ人の女性がいて、その彼女がそのカンファレンスの司会を務めていた。・・・》

この「病気の子ども」に関連しては、この被分析者が求められていたのに延ばし延ばしにしていた報告書の提出のことが連想されました。その報告書はその子どもの治療上、次のステップには是非とも必要とされていたわけであります。その報告書をコンサルタントに提出するのが遅れた理由というのは、彼がいかに威張った態度なのが気に入らず、内心腹を立てていたからです。アメリカ人のご婦人はどうやら分析家であるらしく思われます。彼は彼女がアメリカ人(Donald Meltzer)と結婚していることを承知しております。テーブルで司会役を務めている彼女は、ここではどうやら「乳首・オッパイの結合」されたものが表象されているようであります。メルボルンは The Melbourne でおそらく同様な意味合いを含むものと思われます。つまりメルツァーちなに因んでいるわけです。born of Meltzer といった具合に・・・その彼の著作を彼はつい最近読んでいたのです。すなわち、治療を必要としている‘彼のなかの子ども’にこれからどう対処すべきか、それら「両親の結合」から学ばねばならないといったわけであります。

そこで、赤ちゃんのウィリアムが電灯(分析家・オッパイ)をオンにすることが出来ないといった不安に駆られたときと同様に、被分析者自らそして彼のプライマリーの対象(自動車・ママ)のいずれをも癒いやさんとして、それがため‘お父さんのペニス’並びにその偉大なるパワーと激しく競り合う羽目になり、そこでこのP.医師は「部分対象－関係性」へと退行し、そして基本的に何ら意味のない‘糞便的な対象’に固執し、せつかくの分析・オッパイをもらえる経験の代わりにしたというわけなのであります。

赤ちゃんウィリアムの観察に耳を傾けておりましたのは、ちょうどたまたまP. 医師の分析治療期間とほぼ重なるわけでありますが、ここに記載した分析的資料に肉迫してゆくうえで大いに役立ったわけであります。すでに申し上げましたように、これら2つの例はほぼ任意に選択したものでありまして、ここで「乳幼児観察」を背景にいたしますと、診療室に於いてもその分析的過程で‘幼児的様相’なるものの鮮烈なイメージが連想され、そうしたものとして分析患者を理解しますと大いに有益であるといったことを示唆したかったわけであります。 (訳出; 2016.07.05)

\*\*\*\*\*  
※原典; Collected Papers of Martha Harris and Esther Bick  
(1987), pp. 225-239.  
\*\*\*\*\*